姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第77集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第393次発掘調査報告書―

「姫路侍屋敷図」（姫路市立城郭研究室所蔵）における調査地

2019

姫路市教育委員会

1. 調査に至る経緯・事業の経過

姫路市駅前町293番地において、店舗の建設工事が計画された（図1・2）。計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号020169）に該当することから、平成29年12月13日に工事に先立ち確認調査(姫路城跡第382次調査、調査番号:20170397)を実施したところ、江戸時代の整地層及び土坑を検出した。これを受け、工事範囲である77㎡を対象に本発掘調査を実施することになった。平成30年6月28日に発掘調査委託契約書を締結し調査を開始した。現地調査（調査番号：20180134）に要した期間は、平成30年7月3日から7月19日であった。現地調査終了後、整理作業及び発掘調査報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。調査体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会		文化財課		埋蔵文化財センター	
教育長	中杉隆夫（平成30年3月31日まで）	課長	花幡和宏	館長	前田光則
	松田克彦（平成30年4月1日以降）	課長補佐	大谷輝彦（調整）	課長補佐	岡崎政俊（庶務）
教育次長	名村哲哉	技師	黒田祐介（調整）	係長	森 恒裕（調整）
生涯学習部				技術主任	南 憲和（調査・整理）
部長	岡田俊勝				

2. 姫路城絵図における調査地の変遷及び既往調査

調査地は姫路城の外曲輪に位置し、飾磨門と北条門のほぼ中間地点にあたる(図6)。姫路城絵図(註1)をみると、元禄8年（1695）作成の「播州姫路御絵図」では「畑」と記載され、寛保2年（1742）から寛延2年（1749）の「姫路城下図」でも「畑」とされる。寛延2年（1749）頃とされる「白鷺城旧図」では「馬場」と記載される。寛延4年（1751）から宝暦4年（1754）の作成とされる「姫路侍屋敷図」（表紙写真）(註2)では、文字の記載はないが凡例から両側に「土居」を伴う「道」及び「下御屋鋪」とみられ、「道」の描かれ方が中曲輪北東部の久長門と野里門の間の中堀沿いに位置する「矢場」と似ていることから、「矢場」と同様の土地利用がなされた可能性も考えられる。同様の表現は、安永7年（1778）から文化7年（1810）とされる「姫路城下絵図」でもみられ、一定期間は継続していたとみられる。

1. 姫路城城下町跡（近世・集落跡） 2. 本町遺跡（奈良時代・官衙跡）
3. 駅前町遺跡（弥生時代～近世・集落跡） 4. 豆腐町遺跡（弥生～平安時代・集落跡）
5. 朝日町遺跡（弥生～奈良時代・集落跡）

図1 調査地と周辺遺跡（S=1：10,000）

図2 調査区位置図（S=1：1,000）

前述の「馬場」想定地における既往調査として姫路城跡第 353 次調査 (註 3) がある (図 7)。この調査では南北に並行する 2 条の石組みが検出され、石組み間(約 3.0m)は土塁の基底部の可能性があると指摘されている。

これらの状況から、少なくとも 18 世紀後半以降における調査地は、北半が屋敷地、南半は「馬場」に利用されていたことが想定された。

3. 調査の成果

調査は北区と南区に分割して行った。調査地の層序は概ね近現代の盛土、灰黄色シルト質粘土 (以下 A 層とする)、にぶい黄色シルト質粘土(以下 B 層とする)、明黄褐色～灰白色粘質土(基盤層)に大別される(図 3・4)。基盤層は調査区の中程から南に緩やかに下降しており、これに伴い B 層が厚く堆積していた。基盤層の検出レベルは調査区北部で T.P. 10.6m、南部で同 10.2m を測る。遺構は B 層上面で検出され、土坑 5 基(SK01 ～ 05)、ピット 7 基 (SP01 ～ 07) がある (図 3)。基盤層上面では遺構は検出されなかった (図版 1)。

土坑　いずれも検出面からの深さが 20 ㎝未満の浅いもの (図 5) で、出土遺物は少なく時期・性格ともに不明である。南区ではレンガ構造物による攪乱を免れた範囲において B 層が残るにもかかわらず、SK01 以外の遺構は検出されなかった。遺物は SK02 から須恵器椀 (図版 2-2) が出土した。平高台の側面にヘラ成形が施されるタイプで、平安時代のものとみられる。

ピット　いずれも北区で検出された (図 4・5)。径 30 ～ 40 ㎝を測る小規模なもので、時期は不明である。SP02 は柱痕内に根固め石が確認された (図版 2)。

その他出土遺物　平瓦 (図版 2-1) は北壁の褐灰色土 (第 6 層) から出土した。凹面にミガキを施し、側面上端に面取りがみられる。時期は近世以降のものと思われる。須恵器杯 (図版 2-3)、平瓦 (同 4) は A 層から出土した。3 は杯 B タイプで奈良時代から平安時代前期のものとみられる。4 は凸面に一辺 5 ㎜前後の斜格子タタキを施し、凹面の布目痕は丁寧に消している。側面に 2 段階のヘラ調整、凸面側縁にもヘラ調整が認められる。奈良・平安時代のものとみられる。須恵器甕 (図版 2-5) は B 層から出土した。外面に平行タタキ、内面に同心円文タタキを施す。器表全体が摩耗している。中世前半以前のものであろう。

4. 総括

調査の結果、北区では土坑・ピットが複数みられたが、南区では土坑 (SK01) 1 基を除き遺構は検出されなかった。調査区全体で確認された B 層は姫路城跡第 353 次調査 (図 7) で検出された石組みの下部から東側に広がる自然堆積層に連続する可能性があり、第 353 次調査ではその底付近から江戸時代前期の肥前陶器、備前焼等が出土している。今回の調査では B 層から出土した遺物は僅かであり、その埋没時期を押さえることは難しいが、上位の A 層を含めても近世の遺物は確認されなかった。このことから、少なくとも南区では廃棄土坑等が繰り返し掘削されるような土地利用は近世を通じてなされなかったとみられる。この点は絵図と重ね合わせた図 7 でも南区は「道」に該当しており、それ以前の絵図でも「馬場」・「畑」と記載されることから矛盾しないと思われる。

ただし、今回の調査では絵図に記載される「馬場」に直接結び付くような遺構及び土層は確認されなかった。このため、「馬場」の検討については周辺の調査データの蓄積を待った上で今後の課題としたい。

註 1　姫路市立城郭研究室 2014『姫路城絵図集』による。絵図の記載文字の解読については、姫路市立城郭研究室の工藤茂博氏にご教示を得た。

註 2　「姫路侍屋敷図」は城下町全体の実測に基づいて描かれたとされ、現代の地図と重ねると縮尺は約 1,600 分の 1 となり、図 6 の「姫路城跡 (城郭図)」はその合成図である。ただし、近年の発掘調査の進展に伴い少なくとも外曲輪では多少の誤差が認められることが判明しつつある。

註 3　姫路市教育委員会 2017『姫路城城下町跡－姫路城跡第 353 次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第 48 集

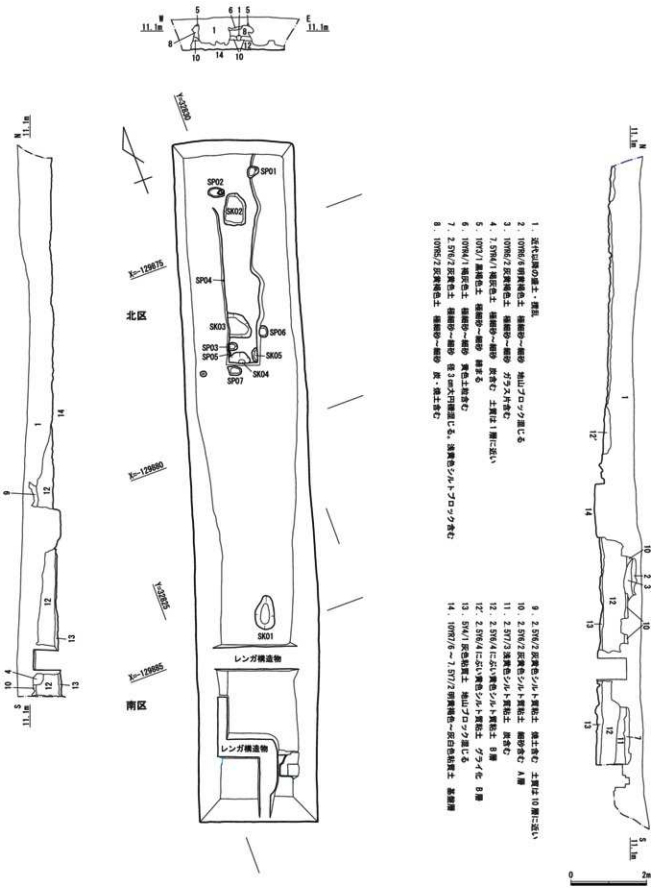
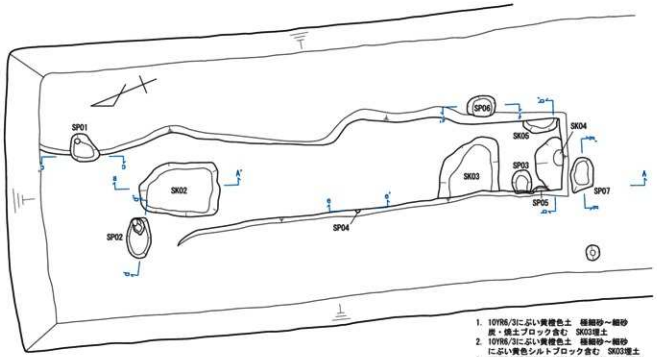
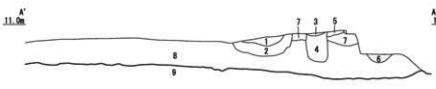


図3 調査区平・断面図（S=1：100）

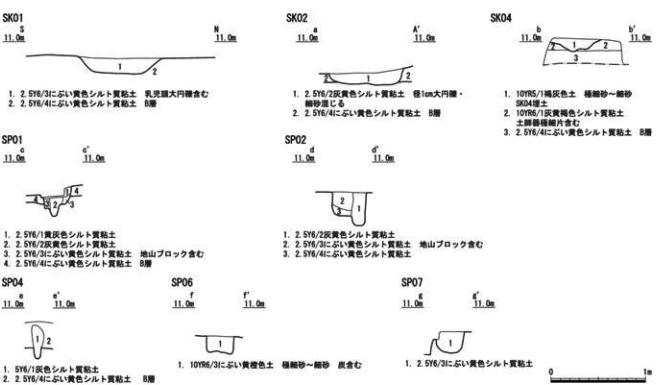




1. 10YR6/3にぶい黄橙色土　極細砂～細砂
炭・焼土ブロック含む　SK03埋土
2. 10YR6/3にぶい黄橙色土　極細砂～細砂
にぶい黄色シルトブロック含む　SK03埋土
3. 10YR5/1褐灰色土　極細砂～細砂　SP03埋土
4. 10YR6/3にぶい黄橙色土　極細砂～細砂
炭含む　SP05埋土
5. 10YR5/1褐灰色土　極細砂～細砂　SK04埋土
6. 2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粘土
7. 10YR6/1灰黄褐色シルト質粘土
土師器極細片含む
8. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト質粘土　酸化鉄集積
径2～3mmの小円礫・土師器極細片含む　B層
9. 10YR7/6～7.5Y7/2明黄褐色～灰白色粘質土
基盤層

0　1m

図4　北区平・断面図（S=1：40）



1. 2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土
2. 2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土
3. 2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粘土　地山ブロック含む
4. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト質粘土　B層

1. 2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土　径1cm大円礫・
細砂混じる
2. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト質粘土　B層

1. 10YR5/1褐灰色土　極細砂～細砂
SK04埋土
2. 10YR6/1灰黄褐色シルト質粘土
土師器極細片含む
3. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト質粘土　B層

1. 2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土
2. 2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粘土　地山ブロック含む
3. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト質粘土

1. 5Y6/1灰色シルト質粘土
2. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト質粘土　B層

1. 10YR6/3にぶい黄橙色土　極細砂～細砂　炭含む

1. 2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粘土

図5　SK01・02・04、SP01・02・04・06・07断面図（S=1：40）

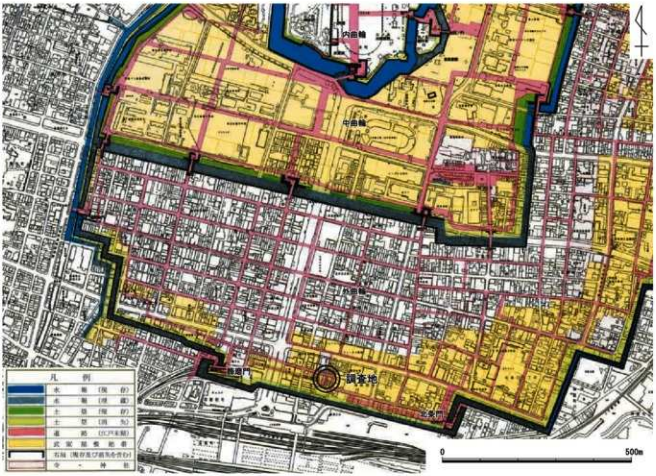


図6 「姫路城跡（城郭図）」における調査地（S=1：10,000）

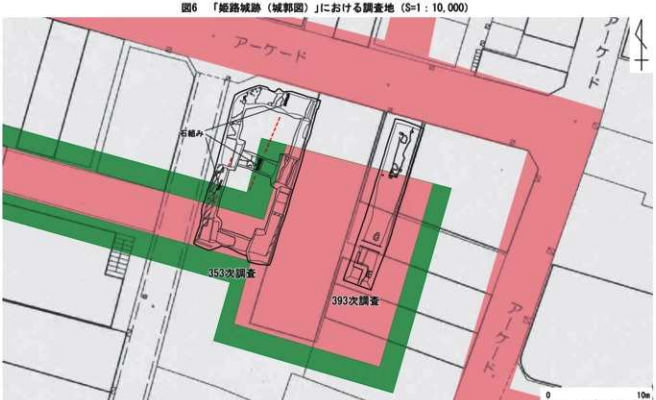


図7 「馬場」想定地における既往調査合成図（S=1：400）

南区東壁・基盤層上面（北西から）

南区西壁・基盤層上面（北東から）

SK01 断面（西から）

北区北壁（南から）

北区全景（南から）

北区断面 A-A'（南西から）

北区基盤層上面（南から）

図版 2

SK02（西から）

SK03 断面（西から）

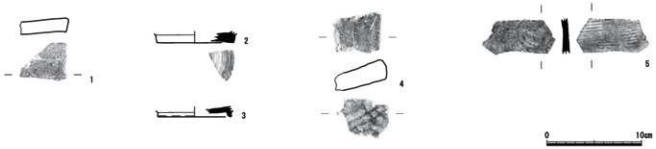
SK04 断面（南から）

SP01 断面（東から）

SP02（南から）

SP06 断面（東から）

遺構写真



出土遺物実測図（S=1：4）

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと　ひめじじょうあとだい３９３じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	姫路城城下町跡－姫路城跡第393次発掘調査報告書－
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第77集
編 著 者 名	南　源和
編 集 機 関	姫路市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1　TEL (079) 252-3950
発行年月日	平成31年（2019年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじしまきまちちょう 兵庫県姫路市駅前町 ばんち 293番地	28201	020169	34° 49′ 43″	134° 41′ 31″	2018.7.3 ～ 2018.7.19	77㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	土坑・ピット	須恵器・瓦	20180134

例言

1. 本書は、兵庫県姫路市駅前町293番地で実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は事業者から委託を受け、姫路市が実施した。
3. 調査は姫路市埋蔵文化財センターの南源和が担当した。
4. 本書の執筆・編集は南がおこなった。
5. 調査に関する写真・図版等の調査記録、出土品は姫路市埋蔵文化財センターが保管している。
6. 標高値は、東京湾平均海面（T.P.）を標準としている。方位は座標北を示す。
7. 土層名の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に準拠した。
8. 遺構は、原則的にアルファベットと数字を組み合わせた番号で表記した。略称は、SK－土坑、SP－ピットを表す。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第77集

姫路城城下町跡-姫路城跡第393次発掘調査報告書-

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1
発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地
発 行 日　平成31年（2019年）3月31日
印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　兵庫県姫路市飾東町庄57-2